

真宗(仏教)における伝道の意義
―ブータンの仏教をめぐって―

L 1 0 0 1 3 7
鷺岡 遊

目次

序論	1
本論	2
第一章 ブータンの幸福	2
第一節 ブータンの仏教	2
第二節 ブータンの風土、国民性	4
第二章 現代社会と浄土真宗	8
第一節 日本と幸福	8
第二節 浄土真宗の利益観	10
第一項 往還二回向	10
第二項 真俗二諦	13
第三項 現生十益	16
第四項 小結	17
第三節 浄土真宗と幸福	18
結論	2

序論

現代において浄土真宗を考えると、考察すべき課題、問題点は様々あるが、この論文を通じて伝道の方法について、また現実的な問題をどう捉えていくかという事について考察したい。

前者について、江戸時代以降、寺受け制度の下で寺と家の関係は密接なものであった。寺はコミュニティの中心として機能し、子供の遊び場、学びの場、大人にとっても寺を利用しての交流というものが多くあったといえる。しかし現代においては、若者の宗教離れが嘆かれ、核家族化により家の形態が変化するに伴い、寺との関わりが希薄化している。また昨今のオウム真理教が起こした事件などの影響により、世間の宗教そのものに対するイメージもあまり好意的なもので無いように感じる。その様な現代社会の中にあつて、今後の伝道というものを考える時、伝道者としてどのように伝道していくべきなのか、ということ考察する。

また、後者について、浄土真宗の教義は現実的な課題に目を向けていないとの指摘を受けることがある¹が、そのような問題をどう捉えるかという事についても考察していく。またこれらの比較対象として、日本と同じように仏教と深く関わりながら今日まで歴史を歩んできたブータンという国を挙げ、その生活、精神風土を窺いながら真宗と比較し考察していく。

第一章 ブータンの幸福²

第一節 ブータンの仏教

ブータンの仏教はチベット仏教から展開したものであり、四大宗派の一つニンマ派、同じく四大宗派のカギユ派から派生したドウク派が主である。はじめ、七世紀にニンマ派がこの地に伝わり、十三世紀前半にドウク派が現ブータンで本格的に布教活動をはじめた。十七世紀にドウクは第十七代法主のシャプドワン・ンガワン・ナムゲルがブータンを統一し、宗教政権を樹立し、ブータンが統一国家として成立した。国家としては十七世紀からであるが、仏教の伝来は七世紀と日本同様、長い歴史を持つ³。この論文においてはこの二つの宗派を大乘仏教、聖道門の仏教として、分別せずブータンの仏教として扱う。

仏教は仏・法・僧の三宝に帰依することからはじまり成仏を目指すものである、思想として、縁起⁴・業⁵・輪廻⁶などがあり、実践として四諦⁷・八正道⁸・戒⁹などがある。その思想の上に自分の身を置き、その中で実践する。その実践により功德を積み、成仏の因とするのである。¹⁰ブータンでは国全体にそのような仏教の思想が行

き渡り、真摯に向き合い実践しているのである

ブータンでは国民のほとんどが仏教徒であり、文化、慣習の中にも仏教の考え、儀式などが多く見られ、ブータン人の生活の一部として仏教があるといっても過言ではない。

戒律により妻帯をしないので、真宗のように世襲により僧侶の家系があるというのではないが、家族の内一人は出家し僧侶になるのがごく当たり前であり、日本よりも僧侶という存在が身近であるといえる。

家庭には必ず仏間がある。日本の仏壇の様なものではなく、家の中の一室がお堂になっている様な感覚である。またブータンの仏教の特長として、それを視覚的に感じる事が出来るルンタやダルシンがある。これらは経文が印刷された五色（白、赤、黄、青、緑）の布であり、竹竿に付けられた長細いものをダルシン、ロープなどに括られ橋や民家の軒先に付けられているものをルンタという。そして、それらが風で一度たなびくと経文を読んだ事と同じ功德があると言う。同じようなものにマニ車があり、これも、一度回転させることで、そこに書かれた経文を読む事と同じ功德が得られるのである。片手で持てるほどのもの、寺院などにある人よりも大きいサイズのもの、水車になっていて絶えず回っているものなど多種多様である。

先に述べたようにブータンの仏教は自力による聖道門の教えである。念仏や経文の読誦も勿論するが、それだけでは功德を積みきれないとして、道具や自然の力まで利用し行に励むのである。戒律も厳格であり、在家者で五戒¹、出家者になると男性で二百五十戒、女性で三百四十八戒を守らなければいけない。仏教では三宝として仏・法・僧があるが、ブータンの仏教ではほかに師があり、師から口伝により教えをいただくのであり、自分が

師事する師を探すこともブータンにおいては大切な行なのである。

在家の者にも戒が与えられ、日々の生活の中に功德を積む行を実践していく。口伝による伝道や慣習としての仏教儀礼など、実践的・慣習的に仏教と密接に関わり、篤信している様子を窺える。

第二節 ブータンの風土、国民性

ブータンはヒマラヤ山脈の麓に位置し、中国、インドなどの大国に囲まれた小国であり、チベット仏教を国で保護する宗教と位置け国民のほとんどが仏教徒であるという世界でも珍しい国である。近年、国王の主導により GNH (Gross National Happiness) という政策を掲げ世界からも注目されている。GNH とは GNP (Gross national product) や GDP (Gross Domestic Product)^{1,2} に対して作られた言葉である。外務省のホームページに

ブータンの一人当たりの国民総所得は1,920米ドル（世界銀行, 2010年）であるにもかかわらず、国勢調査（2005年）ではブータン国民の約97%が「幸せ」と回答しています。「国民総幸福量（GNH）は国民総生産（GNP）よりも重要である」と、1970年代にGNHの概念を提唱したのは、先代のジグミ・シンゲ国王でした。GNHは、経済成長を重視する姿勢を見直し、伝統的な社会・文化や民意、環境にも配慮

した「国民の幸福」の実現を目指す考え方です。その背景には仏教の価値観があり、環境保護、文化の推進など、本柱のもと、9つの分野にわたり「家族は互いに助け合っているか」「睡眠時間」「植林したか」「医療機関までの距離」など72の指標が策定されています。国家がGNH追求のために努力することは憲法にも明記され、政策を立案、調整するGNH委員会が重要な役割を担っています。¹³

とGNHの考え方についてあげられている。

GNHは持続可能な社会経済開発・環境保護・伝統文化の振興・優れた統治力の四つの柱をもとに物質的・経済的な豊かさよりも国民の精神的な豊かさを図るものである¹⁴。このような活動などもあつて、ブータンは幸福の国や世界一幸せな国とよばれる。この節ではブータン人の幸福というものを私の経験を含め仏教の視点から考えていく。

ブータンは長く鎖国状態にあり、国連に加盟したのも一九七一年¹⁵と近代的な文化が持ち込まれてからも年月が浅い。そのおかげもあつてか伝統的な仏教に依拠した生活が色濃く残っている。私が昨年五月にブータンに訪れたときも表面的には近代化が進みつつあるが根本はやはり古くからの慣習を重んじているといった印象であった。私より若い人たちが熱心に寺院に参っていたり、老人たちが朝早くからマニ車を回しながら念仏をしていたり、五体投地で峠を越える人がいたり、日本では見られないような光景であった。また、驚いたことはブータンの人は殺生を嫌い、蚊やハエであつてもむやみに殺さず逃がしてやるのだと言う。話を聞くとそれは戒の実践（五戒の一つである不殺生戒）であり、その蚊やハエが先祖の生まれ変わりかもしれないからであると言う。

オグロヅルが飛来するという理由で外国の援助で電線を設置するのを断った、というエピソード¹⁶もある。オグロヅルに影響を与えないために電線を地中に埋める選択をし、そのために地上を通すより何倍もの時間、労力をかけた。さらには場所により通電するまでの期間に大きな開きがでたが、そのことについて苦言を呈するものは居なかったと言う。「私たちがここに来る以前からオグロヅルはここに居た。私たちの都合でその場所を奪うことはできない」と現地の人たちは言う。

これらの話からも窺えるように、ブータンという国全体に、輪廻・縁起の思想や仏教の戒律が広く影響しているように感じた。

ここで先にあげた GNH へと話を戻したい。ブータンは経済的には後発発展途上国だが、世界で最も幸福な国と呼ばれメディアなどでも取り上げられる。GNH の指標となるのは教育、生活水準、健康、心理的幸福、コミュニティの活力、文化的多様性・弾力性、時間の使い方、良い統治、環境的多様性・弾力性、の九つの領域である¹⁷。

ブータンの近代化が始まったのは最近であるので生活水準の項目では良い評価があるとは言い難い。また健康に関しても医療が十分に発達していないこと、平均寿命が約六七歳で世界第一三一位¹⁸であることなどから評価が低いかもしれない。ではなぜ幸福の国と呼ばれるのだろうか。やはり仏教に根差した生活が関係してくるのではないか。

前述したオグロヅルのエピソードからコミュニティの活力、環境的多様性・弾力性について考える。まず環境的多様性については言わずもがな、弾力性についても自分たちの生活の利便性の向上を投げ打ってまで野生動物

への配慮をする精神から説明できる。またコミュニティ単位でもそれに反発する動きもなく、野生生物保護の立場に立つ活力があると言える。この点からも縁起・輪廻の思想が深く根付いていること、またそれに伴う実践がなされていることが窺える。

次に社会の体制から考える。ブータンの統治について、仏教を国の伝統仏教として保護する姿勢を明らかにしている。そして国王は仏教を含む国内すべての宗教の守護者と言う立場をとっている。また宗教大臣なども存在し国政と仏教は切り離せないものになっている。国民はこの国王、政治体制の下良く統治され不満を言うものはほとんどいない。一般の家庭にまで国王の肖像が飾られるほど信頼が厚いのである。¹⁹

このように国王を中心として国が仏教に寄り添い一つになっている姿を感じることがができる。一つの求心力をもち、それに基づき政治を行っていく、しかし独裁的にはならず、寧ろ象徴として国王が存在している。このことから良い統治において高く評価されていることも納得できる。

文化的多様性・弾力性については、未だ近代文明が流入して年月が浅いこともあり、古くからの文化、慣習が色濃く残っている。それは仏教儀礼や祭り、建築様式、音楽、など多岐にわたる。現在でも村・町をあげて時節の祭礼を行い、そこで演奏される楽器も伝統的なものである。近年、急速に近代文化が流入しているが建築の面では、西洋の建築様式ではなく伝統的な建築様式を重んじている。また、国の方針としても文化の保護に努めており、裁縫・彫刻・描画など伝統儀式などで用いる道具に必要な技術を教える国立技芸学院などもある。

時間の使い方については私の経験であるが、ブータンの人はとてもスローな生き方をしてるように感じた。

仕事をしている人も夜はナイトマーケットに繰り出し、首都ティンブーの夜はとても活気があった。仕事も日本のような生産性最優先の効率主義とは違い、談笑しながらゆったりとした雰囲気の中で作業をしているといった印象であった。またそれに文句を言う人もいなかった。どこか懐かしいような、一昔前の日本の田舎の風景に近いものを感じた。

以上に挙げたことから総合的に心理的幸福度が高いとも言えるのではないか。

このように様々な方向から考察しても、後発発展途上国でありながら、国民が幸福の中にあるということに納得ができる。そして、その根底には仏教があり、個人、コミュニティ、国、それぞれの単位で仏教理論に基づいた実践が行われているのである。

第二章 現代社会と浄土真宗

第一節 日本の現代社会と幸福

では次に日本の現状について考えたい。GNHの指標に照らし合わせていくと日本はブータンとは少し違った立場にあることがわかる。前提として日本はGDP世界第三位の経済大国である。²⁰教育を見ても就学率の高さ²¹の

などから良い評価であると窺える。健康面では世界一の長寿国として知られ、ブータンの平均寿命と比べると二十歳近い開きがある。それは生活水準の高さ、医療技術の高さに裏打ちされたものであろう。生活水準、教育、健康の三領域では世界トップクラスの評価で間違いないと言える。しかしながら、他の六領域ではあまり良い評価が付けられるとは言いがたい。

日本が今日のような経済発展を遂げたのは明治時代以降の急速な近代化の動きの賜物である。

しかしその中で結果的に犠牲になったものは多い。道路、住宅地のための開発、干潟の埋め立て、ダムの建設に伴う村落水没など、日本の原風景、自然を多く失ってきた。これによって失われてしまった動植物も少なくないだろう。

つぎに社会の様子について。日本の社会は発展、効率などが重視されてきた。その結果急速な近代化が成ったわけであるが、その弊害も多々ある。日本では仕事が与えられ、時間内にできない分は残業するなど、勤務時間外でも仕事に時間を費やさなければいけない風潮がある。それを苦にして自殺してしまうというケースが少なからずある。悲しいことに日本の自殺者数は年間約三万人²⁾と諸国と比べても非常に高い数値である。³⁾これらは心理的幸福に関わるであろう。

またコミュニティの活力という観点からすると田舎ではまだ地域でのまとまりはあるように感じられるが、都市部では隣人の顔も知らないほど関係が希薄化しもはやコミュニティとは言えないような状況である。

このように見ていくと近代化が進むにつれて幸福に関する大切なものが失われたように感じる。このような現

代の情勢を踏まえて真宗と現代社会、現実的な問題について考察する

第二節 浄土真宗の救済観・利益観²⁴

第一項 往還二回向

はじめに浄土真宗の救済観について、またその利益観について触れる。

親鸞聖人は『教行信証』の教巻の冒頭に

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について

真実の教行信証あり。²⁵

と示された。浄土真宗の教義の根幹が往相・還相の二種の回向にあることが窺える。またこの往相回向について。

同じく『教行信証』の教巻に

それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功德の宝を施することを致す。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲すなり。ここをもつて如来の本願を説きて経の宗致とすなはち

仏の名号をもつて経の体とするなり。²⁶

行巻に

つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり。この行はすなはちこれもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。しかるにこの行は大悲の願（第十七願）より出でたり。すなはちこれ諸仏称揚の願と名づく、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく、また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり。²⁷

信巻に

つつしんで往相の回向を案ずるに、大信あり。大信心はすなはちこれ長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信樂、金剛不壞の真心、易往無人の浄信、心光撰護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。この心すなはちこれ念仏往生の願（第十八願）より出でたり。この大願を選択本願と名づく、また本願三心の願と名づく、また至心信樂の願と名づく、また往相信心の願と名づくべきなり。しかるに常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂まことに獲ること難し。なにをもつてのゆゑに、いまし如来の加威力によるがゆゑなり、博く大悲広慧の力によるがゆゑなり。たまたま浄信を獲ば、この心顛倒せず、この心虚偽ならず。ここをもつて極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり。²⁸

と明かされた

また証巻に

つつしんで真実の証を顕さば、すなはちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。すなはちこれ必至滅度の願（第十一願）より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。かならず滅度に至るはすなはちこれ常樂なり。常樂はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなはちこれ無為法身なり。無為法身はすなはちこれ実相なり。実相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ真如なり。真如はすなはちこれ一如なり。しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を示し現じたまふなり。 ㊦

と教・行・信・証という衆生が浄土へ往生する様を説明された。

またそれらのすべてが阿弥陀仏によってすでに成し遂げられている、そしてそれが衆生へ回向されている。このすがたを往相回向というのである。

還相回向については、『浄土文類聚鈔』において

二つに還相回向といふは、すなはち利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願（第二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づけ、また還相回向の願と名づくべし。 ㊦

と示されており、信心を得たものは命を終えた時、即ち浄土へ往生し、阿弥陀如来と等しい仏になる。そして、仏として穢土の衆生へ救いを向けるのである。そして、それもまた阿弥陀如来の救いの相なのであると示された

のである。この相を還相回向であると示されたのである。

このように親鸞聖人は浄土真宗を往還二回向と明かされた。では、なぜ親鸞聖人はこのように理解されたのであろうか。その根底にあるのは末法思想である。末法においては教のみしか残っていないために、自らの行は修し難く、成仏の因とはなり得ないと考えられたのである。

第二項 真俗二諦

この項では真俗二諦という言葉を通じて、真宗の教義の上で凡夫のはからいを親鸞聖人がどのように見ていたかについて窺っていく。

まず凡夫のはからいについて教行信証に

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして

真実の心なし。³¹

また

しかるに無始よりこのかた、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂なし、法爾として真実の信樂なし。³²

さらに

しかるに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし。³³
と示された。

また、正像末和讃において

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし³⁴
と示され、一念多念証文においても

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、³⁵

と示された。³⁶このように、徹底して凡夫には真実心が起こり得ないことを強調して示されている。それでは真俗二諦ということを親鸞聖人はどう見られていたのだろうか。

行文類において曇鸞大師の『浄土論註』を引用され

〈真実功德相〉とは、二種の功德あり。一つには有漏の心より生じて法性に順ぜず。いはゆる凡夫、人・天の諸善、人・天の果報、もしは因もしは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。このゆゑに不実の功德と名づく。二つには菩薩の智慧清浄の業より起りて仏事を莊嚴す。法性によりて清浄の相に入れり。この法顛倒せず、虚偽ならず、真実の功德と名づく。いかに顛倒せざる、法性により二諦に順ずるがゆゑに。いかに虚偽ならざる、衆生を摂して畢竟浄に入るるがゆゑなり。³⁷

と示された。

また証文類において最澄の『末法灯明記』を引用し

『末法灯明記』「最澄の製作」を披閱するにいはく、「それ一如に範衛してもつて化を流すものは法王、四海に光宅してもつて風を垂るるものは仁王なり。しかればすなはち仁王・法王、たがひに顕れて物を開し、真諦・俗諦たがひによりて教を弘む。このゆゑに玄籍宇内に盈ち、嘉猷天下に溢り。ここに愚僧等率して天網に容り、俯して嚴科を仰ぐ。いまだ寧処に違あらず。しかるに法に三時あり、人また三品なり。化制の旨、時によりて興替す。毀讚の文、人に逐つて取捨す。それ三古の運、減衰同じからず。後五の機、慧悟また異なり。あに一途によつて済はんや、一理について整さんや。」³⁸

と曇鸞大師の引用より衆生の為す行いは全て不実の功德であり二諦は無いとし、対して菩薩の法は智慧清淨の業より起こるため、その功德は真実功德であり、二諦に準じていると明かされた。³⁹

また『末法灯明記』で示されている真諦・俗諦は曇鸞大師の説かれたそれとは異なり、真諦を仏法とし、俗諦を王法、すなわち仏法に即した世俗の法とした上で、末法の世においては真諦を行じ得るものはいないため、必然的に俗諦はありえない。言い換えれば、衆生は自らのはからいによつて成仏することも、またそれに即した実践をなすこともままならない身であると明かされたのである。⁴⁰このように、末法の世では真諦、俗諦の関係は成り立たない、そして、世俗の法によつて回っている社会の中で、衆生が成仏する方法は唯一阿弥陀如来の回向によつてのみだと明かされたのである。

第三項 現生十益⁴¹

親鸞聖人は信心を得て救われることが定まったものが得る利益について信文類に

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。なにものか十とする。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讃の益、六つには心光常護の益、七つには心多歡喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定聚に入る益なり。⁴²

と現生十益をあげられた。第十益の入正定聚の益が全体を述べたもので前の九益がその内容を説明したものである。この内第一益から第六益は言葉では表す事はできても実際に感じることは難しい、私たちの思議を超えたものであるだろう。

第七益の心多歡喜の益は摂取不捨の救いにあることから喜びを生ずることを言う。これは『十住毘婆沙論』の「しかれば真実の行信を獲れば、心に歡喜多きがゆゑに、これを歡喜地と名づく」⁴³に基づいている。第八益の知恩報徳の益は信心を得たものはその恩を知らされ報謝の生活を送るというものである。そして第九益の常行大悲の益、すなわち如来の大悲を伝える事ができる生活が説かれている。このような信心の生活が第十益に示される入正定聚の益であり本願力による救いのすがた、そして利益なのである。

第四項 小結

このように真宗の救済観、利益観について見ていくと、真宗の特殊性が窺える。まず救済観について通仏教では戒律を守り、行を経て段階を踏み成仏を目指すと考えますが、真宗においてはそれらすべてが阿弥陀如来の本願に誓われ私たち衆生に回し向けられていると考える。衆生はその誓いを疑いなく聞くことで如来回向の信心をいただし現世において正定聚の位に入るのである。

また利益観について、現代において一般的に利益というと神仏に加持祈祷をすることで願いが叶う、病気が治る、など欲望が満たされることだと思われる事が多い。しかし真宗という現世利益は少し要旨が異なっている。物理的に何か変化があるということは言わず、あくまで信心を得たものに信心を歓喜する心が生じるなど内的な転化が起こる、といったものである。そしてそのすがたもまた仏恩報謝という形で阿弥陀如来へ向かっていくのである。真宗において実践が語られるとすると、それは現生十益にあらわされるような仏徳讚歎、仏恩報謝のすがたに尽きるのではないだろうか。

このような真宗の救済観、利益観を踏まえ、次節では具体的に真宗と幸福について論じたい。

第三節 浄土真宗と幸福

真宗の門徒は慈悲深い、勤勉であると言われることがある。このことについて前節までの内容を踏まえ、具体的に土徳という言葉を通じて、真宗信仰と現実の社会においてそのような相が現れ得るかということの因果関係について考察する。

前節の内容から窺うに、真宗においては我が行による功德を成仏の因としない(できない)。したがって、真宗信仰と慈悲深いことや勤勉であることとの因果関係は普遍的には言い難い。それを認めてしまえば、条件としてそのような実践が必要であると逆説的に言えるからである。私は真宗門徒がそのように言われる所以は真宗に育まれた風土にあると考える。真宗地域のそのような風土は土徳という言葉で言い表されてきた。

土徳とは真宗地域独特の土地に根ざした徳を指すもので、北陸、中国地方などの地域で言われることが多い。

ここで「講」をめぐって考察する。講は蓮如上人が広く布教をする礎とされたもので、同じ真宗の信者が集まる場として、村・集落単位で形成された。そこで蓮如上人の御文章を読み、共にご法義を喜ばれたのである。また当時は、識字率が低かったが、読めるものが読み聞かせることで、字が読めないものにも真宗の教えが広がっていたのではないか。⁴⁴

講は単に布教の場だけでなく、社交の場としても機能していた。村の人が集まる場として、情報交換の場であり、コミュニティとして講というものがあつたように思う。そして真宗独特の講・また聴聞によって共にご法義

を喜んでいく集まりから教えが伝播し真宗王国と言われるに至ったのだろう。また、聴聞をする中で仏教の話を聞く機会も多いだろう。その中で仏の慈悲の心、縁起、戒律などの話を聞くことも多かっただろう。そのような仏教の話を聞いていく中で、あくまで自分の中での転化として社会実践を伴った生活へ傾倒していく事もあったのかもしれない。加えて、都会と田舎にかかわらず、閉塞的で閉鎖的な社会においては、助け合って生活していかなければならない。寺や講を中心としたコミュニティの形成は、真宗というカテゴリーの中の人同士の結びつきも強かったのではないだろうか。その中で助け合う姿を慈悲と比喻されたのかもしれない。

序論において、真宗には具体的な実践がなく現実的問題に目を向けていないと揶揄されることがあると問題提起をした。しかし、このように真宗によって形成された風土から考えると決して関係がないと言い切ってしまうことは出来ないのではないだろうか。

具体的に第一節で挙げたGNHの指標に基づく幸福に関する日本の現代社会の問題と、真宗信仰によって培われた風土を照らし合わせて考察する。

コミュニティの活力という意味では直接的に影響してくることは明らかである。それは真宗地域において実際に講の存在、地域の中心として寺があることなどから窺える。

このような講などの存在は、習慣や地域独特の文化・伝統を育み、それらの多くは現代まで大切に守り続けている。その原動力として、真宗への信仰心、仏徳讃歎・仏恩報謝の姿勢があるのではないか。ここから文化的多様性・弾力性が育まれるということも説明できる。

また心理的な幸福について、前節で挙げた現生十益の第七益・第八益・第九益から関係性が言えるだろう。信心を得たものは阿弥陀如来の救いに撰め取られたものとして歓喜の中で安心の中で生きていくと明かされているのである。娑婆の苦悩の世界にありながら阿弥陀如来に救われる身であることを喜ぶ姿は、個人の味わいとして心理的幸福を得たと言えるかもしれない。しかし、先に論じたようにそれらの行いや幸福は風土の中で生まれたもの、個人の内から生じたものであるということに留意しなければならない。真宗の教義とそのような相を直接的に結びつけてしまうと真宗の教義そのものを崩してしまう恐れがある。またそれらの相が現れることは言えるがそこに必然性、普遍性が無いことにも注意しなければならない。

ここで梯實圓氏が『歎異抄』の中で紹介された一人の篤信者の説話⁴⁵を取り上げ信心を得ることが社会的倫理・道徳の普遍的ベクトルを示さないことの論拠としたい。

昔、摂津の国に耳四郎という大泥棒がいた。ある時彼は京都を訪れ盗みに入るため姉小路の白河御殿の縁の下に忍び込み時を見計らっていた。夜になると続々と人が集まって来る。その夜は白河御殿で法然上人の法座が開かれるのである。耳四郎も図らずとも法然上人の説法を聞き、仏の慈悲の心のありがたいこと、自分のどうしようもない姿を知らされた。説法が終わると耳四郎は縁の下から這い出し上人に自らが悪人であることを告げ、教えを求めた。上人は念仏の教えを説き、それを聞いた耳四郎は涙し合掌した。その後耳四郎は熱心に念仏を唱えるようになったが、盗みの癖は治らなかった。ある時、盗賊仲間が耳四郎の勢力が強くなることを妬み酒を飲ませて殺そうと企てた。酔って寝てしまった耳四郎を、仲間が刺し殺そうとした。しかし、仲間は耳四郎が眠った

まま念仏を称えており、その顔が仏像と見紛うばかりに穏やかに輝いているのに気づく。仲間は刀を捨て、耳四郎を拝んだ。耳四郎が目を覚ますと自分を拝む仲間がいる。理由を聞くと、耳四郎の姿を見てその尊い姿に心打たれ、殺意が消えてしまったのだという。加えて、仲間は耳四郎を殺そうとしたことを恥じ、愚かな自分も念仏の仲間に加えてほしいと頼み、その場で髪を切り懺悔した。そこで耳四郎は改めて念仏の尊さに気づく。そして、愚かな自分に心を痛めておられた如来や法然上人に申し訳がたたないと思い、それ以降盗みをしなかったのである。その後、仲間と共に髪を剃り法然上人の元へ弟子となるべく向かったのである。

この説話で耳四郎は最終的に自らの愚かさに気づき、道徳的実践をしていく。これは先に述べたような個人の身の内に起こる転化である。しかし、念仏者となった後も事件が起こるまでは転化が起こらなかった。もし普遍性が説かれるのならば、念仏者となったその時に転化が起こらなければ、矛盾が生じるのではないだろうか。この様に、この説話から浄土門仏教では信心を得ることと実践や社会的倫理・道徳や具体的な実践の因果関係は普遍的ではないと言える。この説話においては、阿弥陀如来の救いのはたらきの素晴らしさと、そのはたらきを知ったものの仏徳讃歎の相についてしか触れていないのである。そして同時に、その仏徳讃歎が他人を教化していくすがたもあらわされている。これが真宗においても全てであると言ってもよいのではないだろうか。

親鸞聖人は娑婆の凡夫の生き方、実践については言及されない。ただ阿弥陀如来の回向を述べられた。しかしその中で真宗風土、土徳というものは確かに現れてきたのである。

結論

ブータンの仏教信仰と幸福の関係、真宗の信仰と幸福の関係についてそれぞれ考察してきた。ブータンにおいては、聖道門の実践があり、それが社会の道徳、倫理観と直接的結びついていることが窺えた。そして、仏教の実践は国の方針であるGNHにも大いに作用している。言い換えれば、ブータンでは仏教の信仰、また、それに伴う実践が幸福を育んでいるのである。

真宗と幸福ということを考えて、直接的な因果関係は見いだせなかった。その根拠としては真宗が浄土門の仏教であること、また、幸福ということを規定していくとそこには往々にしてはからいが生じてくるということである。幸福とはあくまで娑婆の論理のものである。それを阿弥陀如来の誓いと結びつけてしまい因果関係があると行ってしまふとそもそも教義が崩れてしまふ。

わたしたちが生きているのは娑婆の論理の世界である。教義で言わないことと分かりながら味わいとして実践的な相が現れてくる可能性はある。真宗の教えに触れる中で自らの内で転化はある。そこから出てきたものがブータンの示すような幸福、実践として現れてくることはあるだろう。しかし、そこに必然性・普遍性は無い、このことは耳四郎の説話からも窺える。

幸福というものを指標に考えると聖道門仏教と浄土門仏教では異なる点が見受けられるが、その二つで共通するところはやはり仏のありがたさであり、仏徳を讃歎する姿ではないだろうか。そして真宗においてはそれが教

義の根幹であり、全てと言ってもいいのではないか。

序論の問題提起に私なりの答えを出すと、まず現実的問題に目を向けてないと指摘がある点について。真宗の教義を窺うと、成仏という目的に対して自らの雑行を捨て、阿弥陀如来の救いの回向に任せるといえるものであるため、実践として現実的問題に対するものは無い。しかし、真宗によって育まれた風土の中にはそのようなものが見受けられる。真宗において、直接的ではなく副次的ではあるがそのような相が現れる可能性がある、ということまでしか言えないのではないか。真宗の教義の上から言えば、信仰の上の実践は仏徳讃歎・仏恩報謝である。そこに、あらゆる社会的な相、風土が生まれ得るのである。

最後に伝道の方法について。

直接的に社会での実践や世間で言われる様な利益を説かない真宗は、真宗に触れたことのない人にとっては具性がなく判りにくく感じられるかもしれない。むしろ、ほとんど仏教(宗教)に触れずにいた人にとっては何か怪しい危ないもののように捉えられることもあるだろう。そのような人に如何にして仏徳を伝えていくかというところにも課題がある。宗教というものに拒絶反応を示す人に伝道することは難しい。まずはお寺に参ってもらふことや、聴聞をしてもらうことなどの縁をいただかなければ真宗への導入になり得ない。

風土というものがそのような問題の解決に繋がるのではないか。子供のころから寺で遊んだり、家族について参ったりしていた人にとって、寺は身近なものに感じられるだろう。慣習として寺で行事をするような地域でも同じことが言えるのではないか。現代において宗教というものが持つ負のイメージを払拭するためにも寺は

開かれた場所であるべきだと考える。そして、その地域とともにある寺という環境を作っていくことが大切なのではないだろうか。そして、その中で仏様の救いを喜ばせていただくのである。

真宗は伝道教団でありお聴聞の教団である。伝道は仏徳讃歎である。それに尽きるのではないか。風土を培ってきたものは講やお寺でのお聴聞であり仏徳讃歎であり、仏恩報謝のすがたである。そのような人、集団からは図らずとも教えは広がっていく。そして、また風土を形成していくのである。伝道者として特別に伝道の方法を模索していく事も必要であるが、方法論ばかりが先行し大切なものがないがしろにされる事は恐れなければいけない。阿弥陀如来の救いのはたらきが全てであり、伝道は仏徳讃歎である。そこに付加価値のようなものを付ける必要はない。

むしろ、受け継がれてきた自信教人信の伝道を丁寧に真摯につとめていくことで、親鸞聖人以降七百五十年変わらない伝道の形を大切にしていきたい。

- 1 葛野洋明氏の「現代における真宗伝道の課題」の問題提起をもとにしている。
- 2 この章は元林靖久氏、今枝由郎氏、ドルジ・ワンモ・ワンチュック氏、クンチョック・シタル氏、齋藤保高氏、山際素男氏の著作、萱野智篤氏、黒田清子氏、河合明宣氏の先行研究をもとに私なりにまとめたものである
- 3 ドルジ・ワンモ・ワンチュック氏の『虹と雲 王妃の父が生きたブータン現代史』の中で今枝由郎氏の書かれた「時代背景」(六頁)に依る。
- 4 因縁によつて起こること『真宗辞典』
- 5 造作の義で、我々のすべての行為、精神作用が因となつて、後に何等かの果の報ひ現はるべきものをいふ。
- 6 車輪の廻るごとく、迷の世界を限りなく、生死をかさねて廻ること。『真宗辞典』
- 7 仏教における迷悟因果の綱格を示す。諦は真相の意である。苦諦、集諦、滅諦、道諦の四をいふ。苦諦とは人生の眞実は苦なりといふこと。集諦とは苦を招集する原因のことに、種々煩惱悪業をいふ。滅諦とは煩惱欲愛を滅すること。すなはち涅槃の証である。道諦とは証に入るべき道、手段をいふ。即ち苦集は迷の果と因であり、滅道は悟の果と因である。『真宗辞典』
- 8 仏教の原始的な根本教義の一で、八種の正しい実践修行の意で、聖者の道なる故、聖道といひ、八種に分たる故に分といふ。一、正見(完全にして正しい見解)、二、正思惟(正しく考えること)三、正語(正しい言語を用ゐること)四、正業(正しい行為をなすこと)五、正命(正しく生命を保つこと)六、正精進(善を励むこと)七、正念(正しいことを念ずること)八、正定(心静かに正しい智慧を磨くこと)『真宗辞典』(八正道分)
- 9 身心の過を防ぎ悪を制するやう弥陀の制定するいましめのことにて、佛弟子たるものゝ必ず守るべき生活の規則である。『真宗辞典』
- 10 今枝由郎氏の『ブータン仏教から見た日本仏教』「仏教の中心思想」(一四四頁)に依つてゐる。
- 11 佛教徒として在家の人の守るべき五つの制戒をいふ。不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の五である。『真宗辞典』
- 12 GDP (Gross Domestic Product) ≡ “国内”総生産
GNP (Gross National Product) ≡ “国民”総生産
※ GDPの導入に伴い、GNPの概念はなくなり、同様の概念として“GNI (Gross National Income) ≡ 国民総所得”が新たに導入された。

- GDP は国内で一定期間内に生産されたモノやサービスの付加価値の合計額。「国内」のため、日本企業が海外支店等で生産したモノやサービスの付加価値は含まない。一方 GNP は「国民」のため、国内に限らず、日本企業の海外支店等の所得も含んでいる。以前は日本の景気を測る指標として、主として GNP が用いられていたが、現在は国内の景気をより正確に反映する指標として GDP が重視されている。
- 内閣府ホームページ (<http://www.esri.cao.go.jp/sna/otoiwase/faq/ga14.html>) (二〇一四年一月八日現在)
- 外務省ホームページより引用 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol79/>) (二〇一四年一月八日現在)
- 萱野智篤氏の「ブータンの国民総幸福 (GNH) 政策と伝統文化振興による社会経済的平等—GNH 政策の意義と課題についての予備的考察」『北星学園大学経済学部北星論文集』(第五三卷 一号 九四頁) に示される。
- 外務相 ブータン基礎データによる。 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html>) (二〇一四年一月八日現在)
- 1/5
- 萱野智篤氏の「ブータンと幸福論 宗教文化と儀礼」(七七頁) に示されている。
- 1/6
- 萱野智篤氏の「ブータンの国民総幸福 (GNH) 政策と伝統文化振興による社会経済的平等—GNH 政策の意義と課題についての予備的考察」『北星学園大学経済学部北星論文集』(第五三卷 一号 九四頁) に示される。
- 1/7
- WHO 発表の平均寿命ランキング 二〇一三年版 (<http://www.who.int/en/>) による。日本は八三歳で、WHO 参加一九四ヶ国中一位である。
- 1/8
- 本林靖久氏の『ブータンと幸福論 宗教文化と儀礼』(六九頁) に依る。
- 1/9
- IMF 発表の GDP ランキング (二〇一二年版) (<http://www.imf.org/external/index.htm>) 日本はアメリカ、中国に次ぎ第三位で、ドイツ、フランス、イギリス・・・と続く。ブータンは一六二位である。
- 2/0
- ユネスコ統計研究所発表の初等・中等教育就学率二〇〇〇年 - 二〇〇四年) (<http://www.unesco.org/Pages/default.aspx>) による。
- 2/1
- 内閣府自殺対策推進室 警視庁生活安全局生活安全企画課『平成二四年中における自殺の状況』
- 2/2
- 警視庁 二〇一三年 (<http://www.npa.go.jp/toukei/index.htm>)
- 2/3
- WHO 発表の自殺率の国際比較 (<http://www.who.int/en/>) (二〇一二年段階の最新データ日本は二〇〇九年) においてデータのある一〇五ヶ国中、年間自殺者数が第八位である。
- 2/4
- 主に北村文雄氏の『親鸞の二諦説とその展開』をもとにしている。
- 2/5
- 『浄土真宗聖典(注釈版)』一三五頁
- 2/6
- 『浄土真宗聖典(注釈版)』一三五頁
- 2/7
- 『浄土真宗聖典(注釈版)』一四一頁

4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	2	2
5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	2
梯實圓氏の『聖典セミナー 歎異抄』(二四九頁)に依っている。	加茂順成氏の「真宗的伝道―「御文」と「講」の仕組みに学ぶ―」	『浄土真宗聖典(注积版)』一八六頁	『浄土真宗聖典(注积版)』二五一頁	北村文雄氏の『親鸞の二諦説とその展開』(二五六頁)に依っている。	北村文雄氏の『親鸞の二諦説とその展開』(二七九頁)に依っている。	北村文雄氏の『親鸞の二諦説とその展開』(八六頁)に依っている。	『浄土真宗聖典(注积版)』四一八頁	『浄土真宗聖典(注积版)』一五八頁	北村文雄氏の『親鸞の二諦説とその展開』(二二頁)に依っている。	『浄土真宗聖典(注积版)』六九三頁	『浄土真宗聖典(注积版)』六一七頁	『浄土真宗聖典(注积版)』二四一頁	『浄土真宗聖典(注积版)』二三五頁	『浄土真宗聖典(注积版)』二三一頁
	『印度佛教学研究第』(六十卷 第二号 二十九頁)に依っている。	『浄土真宗聖典(注积版)』三〇七頁	『浄土真宗聖典(注积版)』四八二頁											

〈参考文献〉

書籍

- ・ 教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典―註釈版第二版―』本願寺出版 二〇〇九年
 - ・ 北村文雄『親鸞の二諦説とその展開』法蔵館 二〇一一年
 - ・ 梯實圓『聖典セミナー 歎異抄』本願寺出版 一九九五年
 - ・ 村上速水『親鸞教義とその背景』永田文昌堂 一九八七年
 - ・ 鈴木祥蔵『親鸞と人間解放の思想』明石書店 一九九九年
 - ・ 櫻部建『仏教とはなにか』平楽寺書店 二〇〇二年
 - ・ 伊藤唯真『日本人と民俗信仰』法蔵館 二〇〇一年
 - ・ ドルジ・ワンモ・ワンチュク『虹と雲 王妃の父が生きたブータン現代史』平河出版社 二〇〇四年
 - ・ 元林靖久『ブータンと幸福論 宗教文化と儀礼』法蔵館 二〇〇六年
 - ・ 今枝由郎『ブータン仏教から見た日本仏教』日本放送出版協会 二〇〇五年
 - ・ 山際素男『ドライブ・ラマ自伝』文春文庫 二〇〇一年
 - ・ 高橋卓志『寺よ、変われ』岩波書店 二〇〇九年
 - ・ 河村法雲 雲山龍珠『真宗辞典』法蔵館 一九三五年
- 論文
- ・ 殿内恒「真宗文献学の二視点―普遍性と個別性―」『仏教文化研究所』五〇号 二〇一一年
 - ・ 玉木興慈「親鸞思想における大行・大信の思想」『仏教文化研究所』五〇号 二〇一一年
 - ・ 井上善幸「親鸞の証果論の解釈をめぐって」『仏教文化研究所』五〇号 二〇一一年
 - ・ 葛野洋明「現代における真宗伝道の課題」『仏教文化研究所』五〇号 二〇一一年
 - ・ 口羽益生「日本人の宗教意識と社会実践…特に浄土真宗の門信徒を中心に」『仁愛大学研究』二号 二〇〇四年
 - ・ 中山彰信「宗教的利益観についての研究―『教行信証』を中心として―」
- 『九州大学研究論集』一二号 二〇一〇年

- ・辻井清吾「「妙好人」に見る真宗の倫理観」『仏教経済研究』四二二号 二〇一三年
- ・星野元興「真宗寺院にみる廃寺の現状…鹿児島県、富山県、広島県の事例から」
- 『地域政策科学研究』一〇号 二〇一三年
- ・和田俊昭「神と人の間…北陸真宗門徒における蓮如伝承」『京都女子大学人文論叢』五六号 二〇〇八年
- ・黒田清子「ブータンの国民総幸福(gross national happiness)と自文化観」
- 『金城学院大学論集・社会科学編』八号二〇一二年
- ・河合明宣「ブータンのGNH(国民総幸福)開発理念の実現過程—森林保全と地方分権化を軸に—」
- 『放送大学研究年報』二九号 二〇一一年
- ・萱野智篤「ブータンの国民総幸福(GNH)政策と伝統文化振興による社会経済的平等—GNH政策の意義と課題についての予備的考察」『北星学園大学経済学部北星論文集』第五三卷 一号 二〇一三年
- ・加茂順成「真宗的伝道—「御文」と「講」の仕組みに学ぶ—」
- 『印度佛教学研究第』六十卷 第二号 二〇一二年